**知床国立公園**

知床国立公園（しれとここくりつこうえん）は、北海道知床半島にある国立公園。

概要

全国２２番目の国立公園として南アルプス国立公園とともに指定された。二本国内最東北端に位置する知床半島中央部から知床岬マデの周辺海域を含む約６０，０００haが公園区域になっている。厳正な保護規制がかけられている「特別保護地区」が陸域公園面積の半分以上を占めており、公園区域の西端の知西別岳は、「遠音別岳原生自然環境保全地域」に隣接している。

知床国立公園を含む一帯（約７１，１００ha）は、２００５年（平成１７年）に「世界自然遺産」に登録された。

歴史

知床半島には、数千年にさかのぼる先史時代の遺跡が数多く残されている。中でも１０世紀前後にｵﾎｰﾂｸ海沿岸で栄えた北方の漁猟民族によるオホーツク文化の影響を受けて、アイヌの人々はシマふクロウやヒグマ、シャチなどを神と崇め、狩猟や漁撈、植物採取などをしながら豊かな自然を大切にした文化を育んできた。

自然

知床半島はぷレート運動や火山活動、海食などの地形形成作用により造られていることから、奇岩や海食崖、火山地形などの多様な景観が形成されている。現在も活動中の火山のうち、知床硫黄山は１９Ⅲ６年（昭和１１年）に約２０万トンの溶融した硫黄を８ヶ月官にわたって噴出している。オホーツク海は地形的・地理的条件により流氷ができる海洋として北半球で最も低緯度に位置する季節海氷域となっている。流氷下にはアイスアルジー（海氷内や海氷の底で増殖する藻類）が増殖し、流氷形成時の鉛直混合により作られる栄養塩の豊富な中層水が表層に運ばれることで植物プランクトンの大増殖が生じ、それを餌とする動物プランクとん、高次消費者である魚類や海棲哺乳類（海獣）、陸上の生物にまでつながる食物連鎖が形成されている。海岸から山頂までの標高差は約１，６００ｍ程であるが、比較的低い標高域から高山帯にあるハイマツの低木林や高山植物群落が発達するなど、多様な植生が垂直的に分布している。

知床半島には手つかずの原生的な自然ガ残されているため、かつて北海道に広く生息していた北方及び南方由来の哺乳類、鳥類がほとんどすべテ生息しており、多様性に富んでいる。陸上にはヒグマやエゾシカ、海域には鯨類や鰭脚類といった大型動物が高密度で生息していることハ、知床半島が哺乳類にとって質の高い生息地となっていることを表しており、特にヒグマは世界有数の高密度状態で維持されている。また、天然記念物に指定されているシマフクロウ、オジロワシやクまげラの繁殖、ｵｵﾜｼの越冬が確認されており、周辺地域はシマフクロウにとって日本国内で繁殖するつがいの約半数が生息している最も重要な繁殖地であり、オオわシにとっては越冬個体数が１，０００羽以上になる世界的に重要な越冬地になっている。河川では、サケ類が著しく優占していることが大きな特徴となっている。

**知床五湖**

知床五湖（しれとこごこ）は、北海通斜里町にある湖（秘湖、沼）である。五湖とあり、一湖から五湖までの名前がついている。ただし、湿地帯にあるため融雪期には数が増える。冬季には遊歩道は通行止めになる。

知床八景の一つに数えられる観光地として、一湖を見下ろす展望台や湖を巡る遊歩道が整備されている。知床連山や原生林を水面に映す素晴らしい風景は、訪れる観光客の心をとらえて放さない。

遊歩道では、エゾリすやエゾシカなどが観察される一方、ヒグマが目撃されることもあり（後述）注意を要する。ヒグマの出没状況によっては、遊歩道の一部または全部が閉鎖される場合がある。また、夜間と冬期は閉鎖される。周辺の植生は、エゾマツやトドマツが主であるが、近年、頭数ガ激増したシカの食害のため天然更新が滞り、全体的な衰退傾向が危惧されている。

2011年５月１０日から遊歩道の入場制限、利用者の事前レクちャーの義務付け、有料化等「利用調整地区制度」が導入されている。

歴史

そもそもは無名の沼であったが、１９７０年代後半から１９９０年代にかけて、地元の営林署の職員などが積極的な歩道の整備に乗り出したところ、核となる観光地がなかった知床半島の名所として、たちまち脚光を浴びることとなった。

利用

一湖近くの高架木道

一湖を見渡すことができる高架木道と展望台、及び五湖を巡る遊歩道の２つの散策ルートが整備されている。

高架木道・展望台の往復は約40分、遊歩道で五湖全てを回る場合は約９０分、一湖・二湖だけを回る場合は40分を要する。

ヒグマが遊歩道周辺に出没した場合には、安全が確認されるまでの期間、遊歩道の一部または全部が閉鎖される。

ヒグマの出没と利用制限に向けた検討

知床五湖は、山間部でありヒグマの生息地ノ中にあるため、遊歩道付近ではヒグマが頻繁に出没する。一方で、観光客が増加するにつれ、遊歩道周辺の踏み荒ラシや食べ歩き等自然環境への悪影響や事故の危険性が懸念されるようになった。２００４年には、遊歩道に出没したヒグマに観光客がﾌﾗｯｼｭを浴びせる事件（襲撃されても不思議ではない行為）が発生した。

前述のとおり、ヒグまが遊歩道週辺に出没した場合には遊歩道が閉鎖されるが、春から夏にかけては閉鎖の頻度が高く、安定した利用ができない状況ともなっており、有識者の中では、遊歩道の閉鎖期間の設定についても違憲の相違が表面化しており、自然保護と観光をいかに共存させていくかが問題となっている。

こうした状況を踏まえ、安全で環境負荷の少ない利用を図るため、ヒグマ対策のための電気柵を設けた高架木道・展望台を整備し、観光客は主にそちらを利用してもらうこととする一方で、従来の五湖を巡る遊歩道については、２０１１年度から入場人数制限、レクチャーの義務づけ、有料化等を導入された。

利用調整地区制度

２０１１年５月１０日より導入された入域制限制度。入域期限はヒグマとの遭遇確率が高くなる５月１０日から７月末までの「ヒグマ活動期」と植物育成の保護を名目とした開園から５月９日まで、８月１日から１０月２０日までの「植生保護期」に実施。ヒグマ活動期は１日最大300人迄としガイドツアー申し込みおよびガイド同行が入域条件。植生保護期は１日３０００人までとし、ガイド不要だが大人２５０円、１Ⅱ歳未満１００円の立ち入り使用料を支払う。

**フレペの滝**

フレペの滝（フレペのたき）は、知床半島プユニ岬東の断崖からオホーツク貝に流れ落ちる滝。知床八景の一景で、知床国立公園および世界自然遺産「知床」を代表する滝の一つである。落差６０メートル、標高８０メートル、。

知床連山を源とする地下水の滝デ、流入河川を持たないため水量が少なく、高さ約１００メートルの断崖の割れ目から染み出した水が涙の雫のように斜面を流れ落ちる様子から「乙女の涙」という愛称で親しまれている。なお、当滝の東隣の崖にある滝は、当滝よりも若干水量が多く男の涙と名付けられている。

**カムイワッカ湯の滝**

ｶﾑｲﾜｯｶ湯の滝（カムイワッカゆのたき）トハ、北海道斜里郡斜里町のカムイワッカ川にかかる滝である。滝自体が温泉となっている。また、最下流にはカムイワッカの滝という「湯」がつかない別の滝が存在する。

概要

標高は４００メートル、落差２０メートルのである。知床半島のほぼ中央にある活火山の硫黄山を源流とするカムイワッカ川に掛かる。

川には温泉が流入し、連続する滝のそれぞれの滝壺が野趣溢れる天然の露天風呂となっており、野湯とも表現される。カムイワッカはアイヌ語のｋａｍうｙ（神、または神のような崇高な存在の意）、ｗあｋｋａ（水の意）であり、この川の温泉成分が強い硫黄成分を含むため有毒であり、生物が生息できない「魔の水」の意味と解釈されている。

知床八景のひとツとして以前から知られていたが、2005年（平成１７年）７月１４日に世界遺産に登録され、訪れる観光客が急増した。一方で、落石の危険性があることから、厳しい立入規制が行われるようになった。

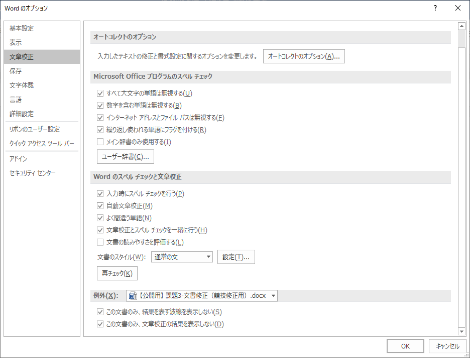
カムイワッカの滝

カムイワッカ湯の滝の約１ｋｍ下流に、カムイワッカ川の水が直接、オホーツク海に落下するカムイワッカの滝がある。落差は約３０ｍ。幅広の姿形を持つ。こちらは陸路で近づくことは困難であり、ｳﾄﾛ港から運航される遊覧船から見ることができる。標高は40メートル。。

落水が硫黄などを含む強い酸性であるため、河口付近は岩場に藻がほとんど生えず、化学反応で海水がエめらルドグリーンになっている。秘境の知床を代表する滝の１つであり、かつて滝のそばで硫黄を採掘していた小屋跡が現在もその柱を残している。

この文書を使用して課題練習を行う際、あらかじめ次の設定をしておくと、「Wordのスペルチェックと文章校正」の赤波線および青波線が非表示になりますのでご確認ください。

「ファイル」タブ「オプション」の「文章校正」



この２つにチェックを入れる